

奈良と薬の古い関係

奈良県と薬の関わり

医薬は、人々が生きていく上で重要なものであることから、言い伝えや歴史書の中で医薬の神々との関わりが述べられています。[医薬の神々]

奈良と薬の関わりあいは古く、日本書紀には、推古天皇が現在の宇陀地方で薬狩りをされた（611年）という記述があります。[推古天皇の薬狩り]

古くは、寺院が薬と深い関係を持っていました。中国から^{いやくじゆつ}医薬術の導入、薬の輸入などをして、民衆^{やまい}を病から救済しようという寺院がありました。有名な東大寺の正倉院には、当時のくすりが納められています。[東大寺正倉院]

いくつかの寺院では、それぞれ秘伝の処方による薬が作られ、^{せやく}施薬が行われました。

一方、お茶という形でも薬は一般に広まりました。[西大寺の^{おおちやもり}大茶盛]

むかしは、薬という大変高価で一般には手の届きにくいものでした。そのため、自分の健康を自分自身で維持するために、身近な薬草やその他の天然物を利用しようとして、様々な知識・経験が蓄積されました。こうして利用された薬草などを民間薬といいます。

20世紀に入るまで、日本の医薬品の主体は、^{かんぽう しょうやくしょぼう}漢方・生薬処方でした。当時の医学の知識は、中国伝来の医術を基礎としており、用いられる生薬も中国のものが主流でした。

天産物である生薬の確保・安定供給は重要な問題でした。当時、高価な生薬を輸入する一方、国内でも調達できないものかと、^{やくようしょくぶつ さいばい さいしゆ}薬用植物の栽培・採取が試みられました。中国などから^{しゆびよう}種苗を導入するだけでなく、国内に自生する植物の中から利用・代用できるものあるいは、より日本人の体質に合ったものが探されました。[^{うえむらまさかつ さいやくぎよう}植村政勝の採薬行]

このような状況のなかで、^{やまと}大和（奈良県）では数々の優良な品種が確立されました。

その一方で、全国各地の薬を必要とする人々を相手に、薬を販売して廻る産業が興り、「置き薬」という独特の形態をとるようになりました。

現在でも、^{はいちかていやく}配置家庭薬として、全国の利用者にユニークな医療サービスを提供しています。

医薬の神々

医薬は人々の健康を守る大切なものとして、伝説の神々との関わりが今に伝えられています。古代中国の伝説に登場する^{しんのう}神農は、医療と農耕の術を教えたとしていて^{つかさど}医薬と農業を司る神とされています。

日本でも^{すくなひこなのかみ}少彦名神が、^{しんのう}薬の神として「神農さん」とも呼ばれ大阪の道修町の^{すくなひこなじんじゃ}少彦名神社に祭られているほか、「日本最古の神社」と称されている奈良の^{おおみわじんじゃ}大神神社に、^{おおものぬしのおおかみ しゆさいしん}大物主大神を主祭神とし、^{おおなむちのかみ すくなひこなのかみ はいし}大己貴神と少彦名神が配祀されています。

^{おおみわじんじゃ}大神神社では、毎年4月18日に春の陽気による災難・疫病を鎮め、^{むびようそくさい}無病息災を祈願するため、^{はなしずめのまつり}鎮花祭が執り行われています。



おおみわじんじゃ おおみわじんじゃていきよう
大神神社 (大神神社提供)

推古天皇の薬狩り

日本書紀には、推古天皇が現在の宇陀地方で薬狩りをされたという記述（611年）があります。

当時、^{けものが}獣狩りをされようとした推古天皇を、皇太子がお^{いさ}諫めし、中国の風習に^{なら}倣って、代わりに薬狩りをするように^{しんげん}進言し、聞き入れられたとのこと。

その後も、朝廷と薬物の関わりは深く、藤原京（694～710）跡からは、薬物のことを記した^{もっかん}木簡（^{やくよう}薬用人参等25種）が出土しています。



薬狩り壁画（星薬科大学所蔵）

東大寺正倉院

東大寺正倉院の御物の中には、^{うるしひつ}21の漆櫃に納められた60種の薬があります。これらの薬は単に^{ほうけん}奉獻されたものではなく、一般への^{せやく}施薬を考えたものでした。すなわち、病に苦しむ民衆に分け与え、

使った分は順次補充するというものです。

^{ほうるしやなぶつしゆじゆやくちよう}奉盧舎那仏種々薬帳の中には、次のように記されています。「以前（列記した薬物の意）堂内に安置して^{るしやなぶつ}盧舎那仏（大仏）を^{くよう}供養す、もし病苦のため用うべき者あれば、僧綱（東大寺の寺務所）に知らせて使用を許可する。伏して願わくば、この薬を服用する者は万病はことごとく除かれ^{せんく}千苦はみな救われ、諸善は^{しよぜん}成就し、諸悪は断ち切られ、長寿で^{ようせつ}夭折することない。そして最後に生命を終わったあと、^{れんげぞうせかい}蓮花蔵世界（^{ごくらくじょうど}極楽浄土）に往生し、^{るしやなぶつ}盧舎那仏にお会いでき、^{ぶつぼうせかい}仏法世界を^{たいとく}体得できるように。」



東大寺正倉院正倉（宮内庁正倉院事務所より提供）

うえむらまさかつ さいやくぎょう 植村政勝の採薬行



森野旧薬園

はちだいしょうぐんとくがわよしむね
八代将軍徳川吉宗は、薬草に強い関心を持ち、
こいしかわやくえん こいしかわしよくぶつえん
小石川薬園（現小石川植物園：東京都文京区）を
かくちようせいび さいやくし
拡張整備するとともに、各地に採薬使を派遣しまし
た。

さいやくし
採薬使のうち、もっとも大きな足跡を残したのが
うえむらさへいじまさかつ
植村左平次政勝です。

うえむらまさかつ
植村政勝は、1720年から34年間にわたって、
とうき
86回各地を踏査しました。

やまと
大和（現在の奈良県）には1726年と1727
年に足を踏み入れ、1729年に150日間にわた
る大旅行「伊賀伊勢紀伊大和山城河内6カ国御用」

を行いました。その後も、1732年、1734年、1735年の3度大和を訪れています。

い が い せ き い や ま と や ま し ろ か わ ち ご よ う
この伊賀伊勢紀伊大和山城河内6カ国御用には、宇陀郡松山町（現宇陀市）の森野藤助らが同行し
ました。もり の とう す け さいやくぎょう はいりょう
森野藤助は、採薬行のあと幕府から薬草6種を拝領して、自ら採取した薬草とともに、（現
在の宇陀市にある）自宅の背後にある台地の畑に栽培し、もり の きゅうやくえん
森野旧薬園を始めました。

大和売薬の始まり

江戸時代中期に大和の名薬として、こめだ さんこうがん
米田の三光丸、藤井
だら に す け
の陀羅尼助、そめいさん
中嶋の蘇命散が著名となりました。天明元年
やくしゆ や あいぐすりやかぶせつりつ
には薬種屋合薬屋株設立の願いがあがり、複数の業者があ
がりました。

やまと ばいやく こうはん
18世紀後半には大和の売薬は広汎な展開を見せていま
した。やまと はいちばいやく
大和の配置売薬は富山のように藩の政策として拡大
されたのではなく、民間の力で広げていった経緯がありま
すが、幕末の頃にはほぼ全国に行商圏を広げることができ
ました。ぎょうしょうけん
当然のことながら富山売薬と競合することになり、
とやまばいやく きょうごう
紛争を避けるためにもお互いに協定を取り交わす必要があ
り、やまと とやま が なかま
大和、富山、加賀との間に取り交わされた「仲間
とりしまりやくぎていしよれんいんちよう
取締役議定書連印帳」が残されています。



な か ま とりしまりやくぎていしよれんいんちよう
仲間取締役議定書連印帳
(三光丸クスリ資料館提供)